文学上のゾンビの原点は？

佐々木　隆

プロローグ

筆者はこれまで「ハロウィーンとゾンビ」(『日欧比較文化研究』第24号、日欧比較文化研究会、2020年10月)、「ポップカルチャーにおけるゾンビ」(『ポップカルチャー・若者文化研究』第5号、ポップカルチャー・若者文化研究、2021年5月)、「ゾンビの一考察―日本でのゾンビブーム」(『むらおさ』第34号、2021年7月）など、ゾンビについて取り上げてきたが、なぜ、ゾンビが流行るのかはまだ疑問が残ったままだ。

ゾンビを考えるとそこには死者の蘇り、死と宗教の問題、生命と死など、様々な問題が横たわっている。科学の時代を迎えていながら、ゾンビが流行る理由は何のか。その源泉を探るべく、ここでは文学におけるゾンビの原典に注目しておきたい。

1　ゾンビとは

現在、エンターテイメントとして登場しているゾンビは本来とは異なる考え方で定着したものだ。ではゾンビの源泉とは何であろうか。伊東美和「ゾンビ映画の源流」(2017）ではこれをヴードゥー教に遡っている

> そもそも「ゾンビ」という単語は、ヴードゥー教と同じく西アフリカにルーツを持ち、コンゴ語の「nzambi（神)」「zumbi（呪物)」と関連性があるといわれている。その意味するところは、ハイチ伝承における生ける屍である。
>
> ゾンビは幽霊ではなく、死後に息を吹き返した人間とも違う。彼らは魂を失った死体であり、ヴードゥー呪術によって生きているかのように行動する。(1)

ゾンビは本来、生きた人間を呪術によって魂も意志も持たずに動く人間のことだ。ゾンビは「なる」ものではなく、「つくる」ものだ。(2) ゾンビは罪に対する罰、憎むべき相手への呪いなどにより物言わぬ労働者となる。

世界中にゾンビが知られるようになった要因には大別すると、３つの段階があるように思える。第１に英語圏にゾンビが知られるようになったこと、第２に映画等においてゾンビが登場してきたこと、第３にゾンビが多様化し、エンターテイメントとして登場する機会が増大したことだ。その過程については前述の筆者のおもに３つの論文等において論じているため、ここではその内容は省略する。中でも第２の映画等の影響はすさまじいものがあり、その影響は日本にもあっという間に波及した。

ゾンビが映画に登場するようになると、これまでの呪術により作られたゾンビから離れ、ゾンビ誕生の設定が多様化して来た。ゾンビを作る、ゾンビになる原因はおもに４つある。

1　ヴードゥー教の呪術

2　宇宙人や宇宙の光線
3　謎の病原菌や細菌
4　理由はわからないが死者が蘇る

そして概ねゾンビには以下の特徴がある。

1　死者の蘇生
　→　呪術等によりゾンビ化する。
　→　吸血鬼のように噛みつかれたものがゾンビ化する。
　→　死んでもなお行動する姿を総称してゾンビ化すると表現されることが多くなる。
2　ゾンビの急所は脳（脳幹部）で、ここを破壊すると活動が停止する。
3　ゾンビとなったものは生前後の性格などがなくなり、本能のままに行動する。
　→　人間を襲う。人間を食らう。
　→　変容後：生前後の性格などを持ったままゾンビ化する。本来、集団行動はしないが、命令通りに動くようになり、組織的な動きを見せる。
4　ゾンビとなった者は行動力が低下し、通称、ゾンビウォークで行動する。
　→　変容後：ゾンビウォークにこだわらず、走るなどの人間のような運動能力がある。

共通しているのは、死者が蘇ることだ。

2　死者が蘇る恐怖の映画

死者が蘇るのはゾンビだけではない。いわゆる恐怖映画の類は死者が蘇るのがひとつのテーマだ。死者が蘇る恐怖のものとしてはフランケンシュタインの怪物、ドラキュラ、ミイラが挙げられよう。ミイラは実際には蘇るものではないが、エンターテイメントとして作品化する場合には古代エジプトの死体がミイラとしてそのままの状態であり、体が存在していることから、蘇りを想起させるものだ。こうしたことから、初期の恐怖映画として以下のものがある。

J・サール・ドーリ監督『フラケンシュタイン』（*Frankenstein*, 1910）
　＊原作：メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』（*Frankenstein: or The Modern Prometheus*, 1818）
F・W・ムルナウ監督『吸血鬼ノスフェラトゥ』（*Nosferatu: Eine Symphonie Des Grauens*, 1922）
　＊原作：ブラム・ストーカー『ドラキュラ』（*Dracula*, 1897）
カール・フロイント監督『ミイラ』（*The Mummy*, 1932）

＊原作なし。ただし、映画製作以前にエジプトの発掘調査で 1922 年にツタンカーメンのミイラを発見。

ヴィクター・ハルペリン監督『恐怖城』(*White Zombie*, 1932)

＊原作なし。ただし、映画製作以前にハイチのゾンビ現象をまとめた William B. Seabrook. *The Magic Island* (1929)が発表。

奇しくも 1932 年にはヴィクター・ハルペリン監督『恐怖城』が 7 月（1933 年 6 月に日本公開）に、カール・フロイント監督『ミイラ』が 12 月（1933 年 7 月に日本公開）にアメリカで公開された。

コンテンツとしてのミイラについては June Michele Pulliam "Mummies"（2014）で次のような説明がある。

> Mummies in fiction and folkore are normally not to considered zombies, but there are some notable exceptions. In most fictional representations of the mummy, the creature does not even reanimate; instead, it frightens the living by inspiring terrifying dreams or perhaps exacting revenge through a curse laid on anyone who destroy or enter its tomb. However, if zombies are to be understood as creatures who generally lack free will and who are often the walking dead, then a few notable cinematic and literary mummies can be catergorized as zombies. These mummies hace been deprived of their will through magical means, usually through Voodoo or Haitian mysticism. In the case of some mummies, a curse prevents their souls from departing for the afterlife. (3)

ゾンビとミイラには共通性もある。John Richard Stephens, editor. *The Book of the Living Dead* (2010)の冒頭にある John Richard Stephens "Zombies, Vampires, Mummies, and Other Reanimated Corpses"には次のようにある。

> Mummies are another form of the undead. Mummies are kind of spooky to begin with, but when they come back alive they make excellent monsters. Mummies are ancient and visibly decayed, with a desiccated and sometimes geezerlike appearance, making them quite gruesome. (4)

しかし、フランケンシュタインの怪物、ドラキュラはヨーロッパ、ゾンビとミイラは非ヨーロッパで生まれたものだ。宗教的にもフランケンシュタインの怪物、ドラキュラはキリスト教文化圏、ゾンビとミイラは非キリスト教文化圏で誕生したものだ。

死者の蘇りは死生観に関わる文化や葬礼文化とも大いに関係する。体と魂の問題である。魂だけの問題となれば、幽霊、妖怪などが想起されよう。幅広く考えれば、超自然現象や超能力を含め、神秘的で不可思議な現象ということにある。映画としてはいわゆるオカル

ト映画、あるいはホラー映画ということになる。初期のものを挙げるとすれば、以下のようになろう。

ロマン・ポランスキー監督『ローズマリーの赤ちゃん』（1968）
ジョージ・A・ロメロ監督『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』(1968)
W・フリードキン監督『エクソシスト』(1973)
R.・ドナー監督『オーメン』（1976）

日本ではジョージ・A・ロメロ監督『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』(1968)は公開されなかったため、いわゆるゾンビ映画が本格的に上陸するにはあと 10 年の歳月がかかった。

2　混乱する名称

日本でゾンビが流行ったのはジョージ・A・ロメロ監督『ゾンビ』(*Dawn of the Dead*, 1978;日本公開 1979)、ルチオ・フルチ監督『サンゲリア』(*Zombie*, 1979;日本公開 1980)、映画ではないがミュージック・ビデオとして発表されたマイケル・ジャクソン『スリラー』（1982）の影響が大きい。日本は劇場公開された映画は 2～3 年後に TV で洋画劇場として放映されることが多く、『ゾンビ』『サンゲリア』も例外ではない。(5)

しかし、海外の映画が日本で公開される時には邦題もまた、映画がはやるかどうかの大きな鍵のひとつだ。「ゾンビ」という言葉やその概念が日本に馴染みのない時代ではあえて邦題に採用しない場合もあれば、新しいものを流行らせるという意味で使用することもあるだろう。特に 1970 年代以降は大きな混乱が見てとれる。また、英語タイトルでも“Zombie”ではなく、“the living dead”という表現も多様されている。邦題と原題の関係を見ておきたい。

監督名	邦題	原題（製作年）
ヴィクター・ハルペリン	『恐怖城』	*White Zombie* (1932)
ジーン・ヤーブロ	『死霊が漂う孤島』	*King of the Zombies* (1941)（未）
ジャック・ターナー	『私はゾンビと歩いた!』	*Walked with a Zombie* (1943)
ジョン・ギリング	『吸血ゾンビ』	*The Plague of the Zombies* (1966)
ジョージ・A・ロメロ	『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』	*Night of the Living Dead* (1968)（未）
ジョージ・A・ロメロ	『ゾンビ』	*Dawn of the Dead*（1978）
ルチオ・フルチ	『サンゲリア』	*Zombie* (1979)
マックス・カルマス・カルマノウィッツ	『チャイルド・ゾンビ』	*The Children* (1980)
サム・ライミ	『死霊のはらわた』	*The Evil Dead* (1981)

ゲイリー・A・シャーマン	『ゾンゲリア』	*Dead & Buried* (1981)
スチュアート・ゴードン	『ZOMBIO/死霊のしたたり』	*Re·Animator* (1985)
ジョージ・A・ロメロ	『死霊のえじき』	*Day of the Dead* (1985)
ダン・オバノン	『バタリアン』	*The Return of the Living Dead* (1985)

いわゆるゾンビ映画は現在のように「ゾンビ」という言葉が周知される以前から日本でも紹介されている。日本の場合には英語のタイトルをどのように紹介するかは興行成績全体に関わる大きな問題だ。ネーミングによる宣伝効果は絶大だ。その邦題タイトルにはいくつかの特徴がある。

1　外国語をそのまま使用する。あるいは発音に近いカタカナで表記する。
　Star Wars (1977)　『スターウォーズ』
　Home Alone (1990)　『ホーム・アローン』
2　外国語のタイトルをできるだけ日本語に当てはめて翻訳したタイトル。
　Beauty and the Beast (1991)　『美女と野獣』
　Harry Potter And The Sorcerer's Stone (2001)　『ハリー・ポッターと賢者の石』
3　外国語のタイトルをそのまま使用せず、映画の内容を反映させるタイトル。
　The Moment of Truth／The Karate Kid (1984)　『ベスト・キッド』
　Frozen (2013)　『アナと雪の女王』

ゾンビ映画の場合には原題と邦題の大きな混乱はジョージ・A・ロメロ監督『ゾンビ』(*Dawn of the Dead*, 1978) とルチオ・フルチ監督『サンゲリア』(*Zombie*, 1979)だろう。ゾンビ映画の場合には全体的に次のような傾向にある。

1　原題に Zombie, Zombi, Zombies が含まれている場合にはそのまま「ゾンビ」の表記を生かす場合。
2　原題に Zombie などの表記がない場合でも内容がいわゆるゾンビ映画であれば、「ゾンビ」の表現を含めた邦題とする場合。
3　すでにゾンビが周知されていることから、邦題では「ゾンビ」にあえてこだわらず、原題や内容を重視する場合。あるいはインパクトのあるカタカナ邦題を付ける場合。
　Resident Evil (2002)　『バイオハザード』

ゾンビと同様に扱われるものにグールもある。グール (ghoul) はアラビア語から由来するもので、女性のグールはグーラと呼ばれるらしい。グールは人間の死体を食したり、小さな子供を食べることもあるような悪魔だ。ゾンビは西アフリカ、グールはアラビアにルーツを持つことになる。いずれも英語圏やキリスト教文化圏ではないところから来たものだ。異文化圏から来たものにどこか神秘的なものを感じる、あるいは何か異なった印象を持つ

ことはよくあることだ。これは前述のミイラも同様だ。

日本でも戦前であるが、*White Zombie*、すなわち、ヴィクター・ハルペリン監督『恐怖城』(1932) は 1933 年には公開されているが、邦題には「ゾンビ」は使用されなかった。いわゆるゾンビ映画の金字塔ともいえるジョージ・A・ロメロ監督『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』(1968) は日本では公開されず、同監督による 1978 年製作の *Dawn of the Dead* が『ゾンビ』の邦題で公開された。一般的に日本人がゾンビ映画と言う場合にはこれが一つの原点となろう。その後訪れるホラー映画ブームの中で、ゾンビ映画がひとつのジャンルを形成することになる。

3　死者蘇生

ゾンビの背景には不死（不死身）や死者蘇生（復活）などの概念がある。人間が永遠の命、不老不死にあこがれるのは古来より変わりない。この不老不死は不死身ではない。できるかがり長寿するというのが第一の目的である。この不老不死にはいくつか考え方があるが、本体の人間の体をオリジナルとして、できる限り維持しようというのが基本的な考え方である。次のようなことが考えられる。

1　妙薬や修行により不老不死の状態を保つ。人間の肉体を保つ。
2　身体が損傷した場合には、代わりの臓器等と交換し、人間の体を維持して保つ。
3　身体は補完を目的に機械化し、一種のサイボーグ化する。
4　脳だけを保管し、身体がない状態にする。
5　死んだあとも身体をしっかりと保管する。
6　身体が亡くなったあとも魂が残る。

大形徹『不老不死』(1992) では中国の仙人に触れ、次のように述べている。

> 中国古代の死生観はつぎのように考えてよいとおもわれる。人が死ぬと「魂魄（精神と肉体）が分離し、「魂（精神）は別の世界にゆき「鬼」となる。この別の世界がいわゆる「死後の世界」である。古代の「死」は唯物論的な「死」ではない。矛盾したいいかたとなるが、死んでも「魂（精神)」は生きている。「死」はあの世への通過点にすぎない。その意味で実際に死ぬのは「肉体」である。
>
> 「不老不死」の仙人というのは、この死んで朽ちはてるべき運命にある「肉体」を死なないようにしたもの、であるといえる。古代では「生の世界（人の世界)」と「死の世界（鬼の世界)」がきれいに二つに分かれていた。この二つの世界のなかに割り込むかたちで「不死の肉体」をもつ仙人が登場するようになる。(6)

大形は「肉体へのこだわり」として次のように述べている

「肉体」に対するこだわりは、仙人説がうまれるはるか以前からあった。それはどうもあの世での再生と関連している。あの世での再生には「肉体（遺体）」の完全性が要求されていたようである。『孝子伝』や『孝経』などのなかにはそういった意識が残存している。(7)

このことは埋葬とも深く関わることとなる。大形は次のように述べている。

中国では古来、ほとんどが土葬であった。土葬は肉体を損傷せずに埋葬することである。ここで、斬首してから火葬するのは、相手の肉体を損傷させることを目的としている。

インドなどの火葬では、体を焼くことによって煙とともに魂が天界へのぼっていく、と考えられていた。中国ではその考え方は定着していない。(8)

「肉体へのこだわり」とは何を意味しているのだろうか。すなわち「遺体が完全でなければあの世に生まれかわれないという考え方によって、自分の体や親の遺体を大切する」(9)ということになる。逆に敵対する者に対しては全く反対の行動となる。遺体を重視する典型としてすぐに思い出されるのはエジプトのミイラだ。また、キリスト教文化圏では宗教的な理由からいわゆる土葬が行われている。三谷茉沙夫『不老不死伝説』(1995) でも次のように指摘されている。

われわれは、以前にも存在していたのか。古代エジプトのパピルスや、チベットの『死者の書』などにも、人間の再生、復活が記されているが、もっとも説得力があるのは『聖書』ではないだろうか。『福音書』によると、イエスは宣教活動のなかでさまざまな奇蹟をおこなっているが、そのなかで死者を蘇生させたという事例が何度か出て来る。当のイエス自身が、十字架の上で磔刑に処せられて絶命し、その死が確認されて、金曜日の夕方に埋葬されているのに、日曜日の早朝には復活して、弟子の前に姿を現している。転生ではないが、明らかに死後の再生である。

「聖書」は、すべての死者が蘇る。「善をおこなったものは、蘇えっていのちを受け、悪をおこなったものは、蘇って裁きを受ける」(ヨハネ五 29)

『聖書』は、人間の死後について明確に語ってはいないが、死が人間の存在を根本的に消滅させるものではないと説いていることは確かである。(10)

復活するための身体となる遺体を重視しない場合にはその魂（精神）が重要され、転生などの考え方が定着している場合が多いようだ。輪廻転生などという言葉はまさにその象徴だ。「死」と宗教の関係が深いだけに埋葬方法などの考え方もその宗教の影響を強く受けることになる。

3　科学と生命

不死身あるいは不老長寿といった考え方には魂と身体をどう考えるかが大きな鍵となっていることがわかる。目に見える形をした身体は人間が人間として認識するには必要な形状ということになる。宗教を背景にしたエジプトのミイラをはじめ、古来より身体を保つことが生命を保つ、あるいは復活、死者蘇生のためには必要という考え方がある。

一方で科学が発達してくると、人間の生命に対する考え方が医学というひとつの学問を通して考察されることになる。人間を知るためには人間の体の構造や組織を知る必要がある。

文学作品上、こうした科学と生命を追求し、人間が新たに生命を与えるという壮大なテーマを掲げたのがメアリー・シェリー（Mary Wollstonecraft Godwin Shelly, 1979-1851）の『フランケンシュタイン』（*Frankenstein: or The Modern Prometheus*, 1818）だ。『フランケンシュタイン』については筆者もこれまで何度か取り上げている。(11)

標題のフランケンシュタインはスイスの天才科学者ヴィクター・フランケンシュタインのことであり、彼が造り出した人造人間は名もない怪物である。

小野俊太郎『フランケンシュタイン・コンプレックス』(2009) ではヴィクターについて次のように説明されている。

> フランケンシュタインという名前だけなら、おそらく多くの人が知っている。だが、そもそも誰のことを指すのかはあまり知られていない。
>
> 答えは簡単で、「フランケンシュタイン」とは、人造人間を作ったヴィクターの苗字である。ヴィクターは、スイスのジュネーブにある代々法律家を生み出してきた名家の出身で、ドイツのインゴルシュタット大学に通う優秀な学生であった。
>
> 発明をしたのは20歳すぎで、博士号をもっていないのは意外かもしれない。だから白髪まじりのフランケンシュタイン博士というイメージは誤りである。裕福な家の出身なので、自分で借りた屋根裏部屋を私設の実験室にして、問題の「怪物」を創造する。もしも、安全な人造人間の量産に成功すれば、学生起業家として、ビル・ゲイツのような人物になれたのかもしれない。
>
> フランケンシュタインはふつう怪物と結びつけられているが、創造者の名だったわけである。こうした誤解はボリス・カーロフが怪物を演じた 1931 年のユニバーサル映画によって広まったそのインパクトがあまりに強かったので、「フランケンシュタインが作った怪物」が、「フランケンシュタインという怪物」だと了解され、20 世紀の常識として定着した。(12)

「フランケンシュタイン・コンプレックス」とはアイザック・アシモフ（Issac Asimov, 1920-1992）の『われはロボット』（*I, Robot.* 1950)の中で提唱されたものだ。すでに拙著『文芸上・映像上の人造人間・ロボット・アンドロイド・サイボーグ』（中編）（2021）でも取り上げているが、重要であるため、再度紹介しておきたい。(13)

『われはロボット』の中でロボット心理学のスーザン・キャンベルとボガートの対話の

中でフランケンシュタイン・コンプレックスという考え方を提示していることも注目に値しよう。

The pscychologist stared at him. "Peter, don't you realized what all this is about? Can't you understand what the removal of the First Law means It isn't just a matter of secrecy."

"I know what removal would mean. I'm not a child. It would mean complete instability, with ano nonimaginary solutions to the posiltronic Field Equations."

"Yes, mathematically. But can you translate that into crude psychological thought. All normal life, Peter, consciously or otherwise, resents domination. If the domination is by an inferior, or by a supposed inferior, the resentment becomes stronger. Physically, and, to an extent, mentally, a robot—any robot—is superior to human beings. What makes him slavish, then? Only the First Land! Whym without it, the first order you tried to give a robot would result in your death. Unstable? What do you think?"

"Susan,"said Bogert, with an air of sympathetic amusement. "I'll admit that this Frankenstein Complex you're exhibiting has a certain justification—hence the First Law in the first place. But the Law, I repeat and repeat, has not been removed—merely modified." (14)

心理学者は彼をじっと見つめた。「ピーター、あなたにはこれがどういうことかわからないの？第一条を除去することがなにを意味するかわからないの？秘密だのなんだのと言っている場合じゃない」

「除去がなにを意味するかぐらいわかっている。子供じゃあるまいし。完全に不安定な状態を意味するだろう、陽電子場の方程式に実数の解がないということをね」

「ええ、数学的にはね。しかし、それを単純な心理学的考察に置きかえたらどう？すべてのノーマルな生命体ならばね、ピーター、意識的にしろ無意識的にしろ、支配されることには怒りおぼえる。もしその支配が、自分より劣った者、あるいは劣っている考えられる者によるものであればあるほど、怒りはさらに増大する。肉体的にも、またある程度は精神的にも、ロボットは—どんなロボットでも—人間より優っているんです。ではなにかが彼らを隷属に甘じさせているのか？第一条だけじゃないですか。あれがなければ、ロボットに命令をあたえようとすれば、たちどころにそれはあなたの死につながる。不安定ですって？いったいなにを考えているんです？」

「スーザン」とボガートは面白がっているような口調で言った。「あなたのいうフランケンシュタイン・コンプレックスにはある正統性があることは認める—だからこそ第一条がすべてに優先しているわけだ。しかし、第一条は、さっきからくりかえして言っているが除去されたわけじゃないんだ—単に軽減されたにすぎない」(15)

アシモフが提唱したロボット三原則との関係から説明されているが、端的に言えば人間以

上の力を持った人間が生み出した怪物に人間が殺されてしまうという恐怖のことだ。現在ではこれがシンギュラリティに到達し、人間が AI に追い越されるのではないか、そのため、AI により仕事が奪われるというかなり現実的な恐怖心も現実化している。(16)

『フランケンシュタイン』について Jason Porterfield. *Robots, Cyborgs, and Androids* (2019)では次のように紹介している。

> While magic was seen as the animating force that brought puppets to life in some tales, advances in mechanics and medicine seemed to put the possibility of restoring or creating life within humanity's grasp.
>
> Author Mary Shelley turned to advances in medical science and a deepening understanding of electricity to create one of the most lasting tales of horror. Her novel Frankenstein; or the Modern Prometheus, published in 1818, tells the tale of an ambitious young scientist who uses his medical knowledge to build a man from body parts and brings him to life with electricity captured from lightning bolts. (17)

『フランケンシュタイン』の原題は *Frankenstein or the Modern Prometheus*、すなわち『フランケンシュタイン　あるいは現代のプロメテウス』である。小説が始まる前に『失楽園』からの引用が紹介されている。

> Did I request thee, Maker, from my clay
> To mould Me man?　Did I solicity thee
> From darkness to promote me?—
> Paradise lost (x.743-5) (18)
> 土くれからわたしを、創り主よ、人の姿に創ってくれと
> わたしがあなたに求めたろうか？　暗黒より
> 起こしてくれと、あなたにお願いしただろうか？—
> 『失楽園』第 10 巻 743-5 行 (19)

『ギリシャ神話』においてプロメテウスの存在は人間にとっては恩人のような神である。ゼウスに反抗し、人間を守ってくれたからだ。人間に火を与えたのはプロメテウスだと言われる。火が無ければ人間は貧しい食生活で健康を維持できなかったばかりではなく、文明さえ生み出すことはできなかった。しかし、皮肉なことに火を手に入れたことで戦争を生み出すことにもなった。

『失楽園』はイギリスの文学者ジョン・ミルトン（John Milton, 1608-1674）が聖書の内容をわかりやすく書いたものだが、ここでは人間が土くれから造られたことをあらためて紹介している。しかも、ここでフランケンシュタイン博士が生み出した怪物を暗示させるような内容になっていることは注目に値することだ。

小説はホフマン『砂男』(1816)と同じように手紙から始まっている。4 つの手紙、物語、

手紙の続きという構成をとっている。ここではまずフランケンシュタインが生命の誕生に関わる源、エネルギーとの出会いについて触れておきたい。

When I was about fifteen years old, we had retired to our house near Belrvie, when we witnessed a most violent and terrible thunder-storm. It advanced from behind the mountains of Jura; and the thunder burst at once with frightful loudness from various quarters of the heavens. I remained, while the storm lasted, watching its progress with curiosity and delight. As I stood at the door, on a sudden I beheld a stream of fire issue from an old and beautiful oak, which stood about twenty yards from our house; and so soon as the dazzling light vanished, the oak had disappeared, and nothing remaind but a blasted stump. When we visited it the next morning, we found the tree shattered in a singular manner. It was not splintered by the shock, but entirely reduced to thin ribbands of wood. I never beheld any thing so utterly destroyed. (20)

わたしが 15 のころ、一家はベルリーヴの近くの家にひっこんでいましたが、そこで、それは凄まじい大雷雨を目撃しました。ジュラ山脈のむこうから近づいてきて、雷が大音響とともに天の四方からいちどきに炸裂しました。嵐が続いているあいだじゅう、わたしはその進み具合を興味でわくわくしながら見ていました。戸口に立っていると突然、家から 20 ヤードばかりのところに立つ美しいオークの古木から、流れるような炎がありました。まばゆい光が失せたとみるや、オークは書き消え、打ち砕かれた根もとだけが残っておりました。翌朝みんなで見にゆくと、木は不思議なやられかたをしているのがわかりました。衝撃でまっぷたつになったのではなく、全体が薄くずたずたにひき裂かれてしまっているのです。これほど徹底して破壊されたものを見るのは初めてでした。(21)

雷が電気であることはすでにフランケンシュタインも知っていた。フランケンシュタインの電気への関心がさらに高まることとなる。怪物は人間の死体から構成された人造人間である。そして、その生命のエネルギーが命のない物体に吹き込まれることとなる。

It was on a dreary night of November, that I beheld the accomplishment of my toils. With an anxiety that almost amounted to agony, I collected the instruments of life around me, that I might infuse a spark of being into the lifeless thing that lay at my feet. It was already one in the morning; the rain pattered dismally against the panes, and my candle was nearly burnt out, when, by the glimmer of the half-extingished light, I saw the dull yellow eye of the creature open; it breathed hard, and a convulsive motion agitated its limbs. (22)

わたしが労苦の完成を見たのは、十一月のとあるわびしい夜のことでした。苦しいほどの熱意に駆られ、わたしは足もとに横たわる命のない物体に生命の火花を吹き込むべ

く、生命の器械をまわりに集めました。すでに午前一時。雨がばらばらと陰気に窓を打ち、蝋燭は今にも燃え尽きようとする、そのとき、なかば消えかけた微かな光に、わたしは生き物のどんより黄色い目がひらくのを見たのです。それは重く息をつき、痙攣が手足を走りました。(23)

怪物の誕生。しかし、この怪物はフランケンシュタインの必ずしも言う通りには行動をせず、自身の意思を持つ怪物。しかし、そんな怪物も最後は自ら命を絶つこととなる。

'But soon,' he cried, with sad and solemn enthusiasm, 'I shall die, and what I now feel be no longer felt. Soon these burning miseries will be extinct. I shall ascend my funeral pile triumphantly, and exult in the agony of the torturing flames. The light of that conflagration will fade away; my ashes will be swept into the sea by the winds. My spirit will sleep in peace; or if it thinks, it will not surely think thus. Farewwll.'

He sprung from the cabin-window, as he said this, upon the ice-raft which lay close to the vessel. He was soon borne away by the waves, and lost in darkness and distance. (24)

「だがすぐに」と彼は悲しくもおごそかな情熱をこめて叫びました。「自分は死に、今感じることももう感じはしなくなる。燃えるようなことの苦悩ももうすぐ終わる。自分は意気揚々と火葬の山に登ってゆき、劫火の苦しみに凱歌をあげよう。大火の明かりはうすれゆき、自分の灰は風に乗り海へとさらわれてゆくだろう。わが魂は安らかに眠る、よしたとえものを思うとも、今のように思いはすまい。さらばだ」

そう言うと彼は船室の窓から身をおどらせ、船のすぐそばに浮かぶ氷の塊におりたちました。そうしてやがて波に運ばれ、はるかなる闇のなかへと消えていってしまいました。(25)

フランケンシュタインの孤独と怪物の孤独が交錯する場面である。怪物に哀愁さえ感じるのは、科学の進歩と同時に残酷さが同居していることを科学者フランケンシュタインと怪物が示しているとも言えよう。しかし、この科学的な根拠をもとに創造された人造人間の怪物はかつてゲーテが創造したホムンクルスとは全く違った様相を持つものであろう。

ここで瀬名秀明編著『ロボット・オペラ』(2004) で紹介しているメアリー・シェリー『フランケンシュタイン』の執筆の背景を引用しておきたい。

1816 年、若きメアリー・シェリー (1797-1851) がレマン湖の畔でバイロンがレマン湖の畔でバイロンやポリドリらと怪談を語り合う (この一夜は『ゴシック』[1986] をはじめ後に多くのフィクションの題材となった)。メアリーはその経験を踏まえ、1818 年に恐怖小説の金字塔『フランケンシュタインあるいは現代のプロメテウス』を発表する (後に改訂された。現在流布しているのは 1831 年刊行の第三版)。メアリーの父親であ

るウィリアム・ゴドウィンは、幼かった彼女にパラケルススなどの魔術的な話を語って聞かせたらしい。またメアリーの夫である詩人パーシー・ビッシュ・シェリー(1792-1822)は化学や電気学を学びながら、やはり一方では錬金術にも惹かれていたという（彼は1820年に詩劇『鎖を解かれたプロメテウス』を発表し、神に挑む人間のあり方を讃えている)。ちょうどエラズマス・ダーウィン（1731-1802）の進化論や、電気生理学の研究が注目を集めていた時代である。生命現象や進化の謎を解明することは、人間が神に取って代わることに繋がる。メアリー・シェリーが描き出した主人公ヴィクター・フランケンシュタインも、パラケルススや化学・電気学に強い関心を抱いて育った学究の徒だ。(26)

では、フランケンシュタインの怪物（以降はフランケンシュタインの怪物を「怪物」と略す）とゾンビをどのように考えるか。

怪　物：複数の死体から必要な部分を取り出し、ひとりの人間として外見を整え、雷のエネルギーで蘇生させる。生前の脳の持ち主の人格をそのまま継承する。
ゾンビ：さまざまな原因により生きたままゾンビ化する。人格などはなくなり、人を襲い続ける。

怪物は外科的な手術によりに体の蘇生を図り、その後生命エネルギーを得て蘇生したが、ゾンビは外科的な処置はない。医学的な措置がない状態で、蘇生する。さらに怪物ははっきりとした意志を持つなど、生前の人間の人格が反映されるが、ゾンビにはこうしたことはない。（その後のゾンビの変遷により意志を持つゾンビも登場するようになる。）科学の力によって誕生したのが怪物であり、非科学で誕生したのがゾンビである。

Geroge A. Romero. *Night of the Living Dead* が公開された1968年は医学的に「死」に対する考え方が変わった時期でもある。Roger Luckhurtst. *Zombies: A Cultural Hisotry* (2015)でも次のような指摘がある。

The release of Geroge Romero's *Night of the Living Dead* in 1968 and the revision of the zombie proved influential for another reason we have not yet examined. It coincided with the emergence of a significant medical transformation of the boundary between life and death. (27)

すなわち、臓器移植に伴い、死の定義を心臓死とするか、脳死とするかという大きな問題であり、ゾンビを倒す際に脳を破壊することと関係するということに結びつくからだ。

The creation of this interval between brain death and biological death shifted death from a decisive moment to an ongoing process. In the dilation of this space between deaths not only were a thousand bioethical issues to bloom but a new panoply of

liminal creature were to be born, including the zombie. No wonder you have to shoot these post-'68 zombies in the head to be sure they stay down.

The definition of 'irreversible coma' has proved problematic and suject to a succession of refinement and subtle gradations, further dilating this zone between deaths. One of the reiteria for establishing brain death in the Ad Hoc Committee proposals was a flat EEG record. However, it transpires that the brain-dead brain can appear to be disturbingly lively on an EEG monitor, even if these signs are often ICU 'artifacts'—misleading records generated in the complex feedback loops of the bodies and machines. (28)

不可逆的昏睡状態（irreversible coma）を脳死とするという考え方がある意味"the living dead"と捉えることもできるかもしれない。

The boom in zombie narratives since 1968 has coincided with this ongoing medical transformation of the definition of death, and the undead are undoubtedly exotic figurations for these new liminal states between life and death. (29)

この 1968 年は日本でも札幌医科大学でのいわゆる和田移植が大きな話題となった。和田移植とは 1968 年に和田寿郎（1922-2011）が中心となり進めた日本初の心臓移植手術のとことだ。殺人罪として刑事告発もされたが、不起訴処分となった。「死」の概念をめぐって医学と法律との摩擦が起きた。厚生労働省 HP にも「20 年目を迎えるからこそ知ってほしい つながっていく臓器移植の輪」として次のように掲載されている。

臓器移植は、病気や事故によって臓器（心臓や肝臓、腎臓など）が機能しなくなった場合に、ほかの人の健康な臓器を移植して機能を回復させる医療です。

日本では、1964 年に生体腎移植や肝臓移植が行われたのが移植医療の始まりです。それ以前に 1956 年には、新潟大学で急性腎不全の患者に一時的に腎臓を移植する手術が行われていました。1963 年にアメリカで世界初の肝臓移植と肺移植、1967 年に南アフリカで世界初の心臓移植が行われており、日本も世界とほぼ同じ時期に移植医療を始めたといえます。

世界各国で移植医療の研究と臨床への応用が行われるようになってくると、「拒絶反応」や「脳死の定義」などの問題も出てきました。

日本では、1968 年に札幌医科大学で日本初の心臓移植が行われました。手術の環境（密室）や脳死判定などについて、さまざまな方面から批判があがりました。この件をきっかけに、日本の移植医療は一度中断してしまったのです。(30)

1968 年の死の定義の問題と"the living dead"は複雑な関係となってくるのだ。もともとはヴードゥー教の呪術から誕生したゾンビであるが、医学の発達などもゾンビの変容と無

縁ではないだろう。

4　メアリー・シェリーからH・P・ラヴクラフトへ

『フランケンシュタイン』は人間を蘇生させるための液体、外科的な手術、雷によりエネルギーを吹き込み、あらたな生命を死体に宿らせ人間を蘇生させ人工的に作り出した怪物を生み出した作品である。これに対してH・P・ラヴクラフト(Howard Phillips Lovecraft, 1890-1937) はさらにこれをすすめ、'Herbert West—Reanimator' (1922) では死者蘇生薬を発明した。

The first horrible incident of our acquaintance was the greatest shock I ever experienced, and it is only with reluctance that I repeat it. As I have said, it happened when we were in the medical school, where West had already made himself notorious through his wild theories on the nature of death and the possibility of overcoming it artificially. His views, which were widely ridiculed by the faculty and his fellow-students, hinged on the essentilally mechanistic nature of life; and concerned means for operating the organic machinery of mankind by calculated chemical action after the failure of natural processes. In his experiments with various animating solutions he had killed and treated immense numbers of rabbits, guinea-pigs, cats, dogs, and monkeys, till he had become the prime nuisance of the college. Several times had had actually obtained signs of life in animals supposedly dead; in many cases violent signs; but he soon saw that the perfection of this process, if indeed possible, would necessarily involve a lifetime of research. It likewise became clear that, since the same solution never worked alike on different organic species, he would require human subjects for further and more specialized progress. (31)

わたしたちが知りあうことになった最初の恐ろしい出来事は、わたしがかつて経験したこともない衝撃的なもので、口にするのもはばかれてしまう。先にも述べたように、これが起こったのはわたしにたちが医学部に籍を置いていた頃のことで、ウェストは死の本質、そして人為的に死を克服する可能性についての奔放な持論を提唱して、既に学内でその名を知らぬ者がなかったほどだった。ウェストの研究目的たるや、教員や学生仲間にもっぱら虚仮にされていたが、生命が本質的に機械的な性質をもつという前提に立ち、自然の生命作用がとぎれた後、相応の化学作用でもって、人間の臓器の機能を活動せしめる手段にかかわっていたのである。そして種々の蘇生液を用いる実験で、おびただしい数の兎、天竺鼠、猫、犬、猿を、殺したり処置をほどこしたりしつづけ、学内一のもてはあまし者になっていた。幾度かは死んだと思われる動物に生命の徴候を実際に得て、たいてい著しい生命反応があったものの、ウェストはまもなく、処置を完璧なものにすることがまさしく可能ならば、どうあっても生涯をかけての研究をつづけなればならないことを知るにいたった。同様に明らかになったのは同一の蘇生液が異なった

生命体には作用するこがないために、さらに一層専門の研究を推し進めるには、人間の死体が必要になるということだった。(32)

冒頭近くの文章である。邦訳名が「死体蘇生者ハーバート・ウェスト」となっていることも注目しておきたい。原題にはない「死体蘇生者」の表現が加えられている。この作品について大瀧啓裕「作品解題」で次のように述べている。

明らかにメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』を意識して執筆されたものだが、はじめての連載という形式によほど苦しんだのか、墓場荒らしや死体蘇生をあつかって毎回恐怖をもりあげようとしているものの、さほど効果をあげられずにおわり、凡庸な作品にとどまっている。(33)

この作品は決して高い評価とは言えないとある。Romero Curtiz. *History of Zombies* (2011)では次のような説明がある。

One of the most successful early stories about the undead was American horror writer H.P. Lovecraft's *Herbert Wester—Reanimator* (1922). Serialized in the amateur publication *Home Brew*, it told the story of a scientist obsessed with cheating death. Lovecraft said he wrote the story as a parody of Mary Shelley's *Frankenstein* (1818). The story includes several references to Frankenstein, including allusions to the poetry of Samuel Taylor Coleridge, an English poet Shelley alluded to in *Frankenstein*. *Herbert West—Reanimator* tells the story of medical doctor Herbert West over the full course of his career, from his time in medical school, to his time as an independent practitioner, to his time in World War I, and after. West believes he can cure death using an experimental re-agent injection. He is met with constant failure－he brings people back from the dead, but they're different, more violent people. (34)

さらに説明は続いている。

The book ends as it began by parodying Frankenstein, but modern readers will find that *Herbert West—Reanimator* has a lot in common with modern zombie stories, with Lovecraft's renamiated rising out of the grave not by magic, mobs, and they may portend the end of civilization. (35)

Roger Luckhurst. *Zombies: A Cultural Hisotry* (2015)には『フランケンシュタイン』については H.P.Lovecraft 'Herbert West—Reanimator' にからめて、フランケンシュタインの怪物の生みの親である Victor Frankenstein が言及されているに過ぎない。

In H.P. Lovecraft's lurid early serial fiction 'Herbert West－Reanimator', a pulp Victor Frankenstein rootles around in graves, morgues and abattoirs for his vivisections, and so sets the tone for the obsession with unruly corpses in *Weird Tales*. (36)

また、'Herbert West—Reanimator'を映画化した *Re·Animator* (1985)については取り上げられていない。

ゾンビを扱う研究書等ではこの『フランケンシュタイン』と『ハーバート・ウェスト』はどのような扱いになっているのだろうか。両者は共に映画化もされており、文学作品、映画作品としても認知されているところである。

「ハーバート・ウェスト」を映画化したスチュアート・ゴードン監督『ZOMBIO/死霊のしたたり』(*Re·Animator*, 1985) について Peter Dendle. *The Zombie Movie Encyclopedia* (2001)では次のように述べている。

The institutional setting of *Re·Animator*, conceptually supported by a steady stream of medical jargon, gives zombies a very different feel from the rotting shambles dominating the zombie movie landscape of the '70s and early '80s. Here there are no religious overtones, no tombstone or graveyard trimmings, no need to look for horror or monstrosity anywhere but in the scientifically analyzed human body itself, laid out under septic bright lights. (37)

もちろん、この映画が原作通りに忠実に製作されたわけではないが、原作同様に宗教色は消え、むしろ医学という科学的な目で見た死体に恐怖を感じさせることになる。

June Michele Pulliam and Anthony J. Fonseca, editros. *Encyclopedia of the Zombie: The Walking Dead in Popular Culture and Myth* (2014) では Richard Bleiler が "HERBERT WEST—REANIMATOR" を次のように説明している。

The series is also notable as an early example of scientific zombie fiction. Though it is difficult to say where such a subgenre begins, one can certainly argue that "Herbert West—Reanimator" was inspired by Mary Shelley's *Frankenstein* (1818), as well as by Jack London's (born John Griffith Chaney, 1876·1916) more contemporary *A Thousand Deaths* (1899). Nevertheless, Lovecraft's treatment of his themes if more modern than both his predecessors, including his recognition that, in the 20th century, the university and its scholars would provide the source for scientific developments. Furthermore, in making use of the events of World War I and bending the horrors of that war to serve his fictional purposes, Lovecraft was among the first, if not the first, to recognize that the horrs emergent from this war were uniquely suitable for fictionalization. (38)

この説明では "Herbert West–Reanimator"のこともあるが、Jack London の *A Thousand Deaths* (1899)に言及していることは注目に値する。

日本のゾンビに関する著作物では例えば西山智則『ゾンビの帝国　アナトミー・オブ・ザ・デッド』(2019) では「第3章　H・P・ラヴクラフトとゾンビ―クトゥルフ神話の影に」が設けられ、その内容も示唆に富むものだ。その内容を簡単に紹介しておきたい。

・近代的ゾンビを誕生させた『NOTLD』では蘇った死体に「ゾンビ」という言葉は使われず、テレビのニュースで「グール」などと呼ばれていた。(39)
・アラブなどの伝説だったグールを都市の地下にひそむ近代的グールに再造形し、ゾンビに近づけたのがH・P・ラヴクラフトである。(40)
・数々のラヴクラフトの映画化作品において、「死体蘇生者ハーバート・ウエスト」(1922年) を映画化したゴードンのカルト映画『ZOMBIO／死霊のしたたり』(1986年) の「死霊」という邦題(41)
・1981 年に製作されたサム・ライミ監督の『死霊のはらわた (The Evil Dead)』は、1985 年の 2 月日本公開され爆発的大ヒットを記録した。その後「死霊」というタイトルが流行する。ロメロのゾンビ 3 部作も『死霊のえじき (Day of the Dead)』という便乗した邦題がつけられ、ファンの顰蹙を買ったものだ。そして、「死体蘇生者ハーバード・ウエスト」を原作とする『リ・アニメーター (Re-animater)』が原題であったゴードンの映画もまた『ZOMBIO／死霊のしたたり』という邦題がつけられてしまった。しかし、ここには皮肉がある。『死霊のはらわた』は山小屋で人間の皮でつくられた『ネクロノミコン』を読んだ 4 人の男女が死霊と化して殺し合うホラー映画だが、『ネクロノミコン』とはクトゥルフ神話の禁断の知が記された架空の魔導書だったからだ。(42)

『NOTLD』とは *Night of the Living Dead* (1968)のことである。H・P・ラヴクラフトが「ゾンビ」を世界中に周知させたわけではないが、先行作品から着想を得て新たな作品が誕生することは決して珍しいことではない。

5　映画になったゾンビ

ゾンビを一般に知らしめた媒体では映画の果たした役割は大きい。Shephen Jones "Introduction: The Dead that Walk"(2013)でも"the true home of the zombie has always been the movies" (43) と述べている。ゾンビ映画の原点を Robert Wiene, director. *The Cabinet of Dr. Caligari* (1920)とするか、Walter Futter, director. *Walter Futter's Curiosities* (1930)なのか、それとも Victor Halperin, director. *White Zombie* (1932)なのかは研究者により意見が分かれている。日本では未公開であるが、George A. Romero. *Night of the Living Dead* (1968)に始まるゾンビ映画は金字塔と言ってもよいだろう。Peter Dendle. *The Zombie Movie Encyclopedia* (2001)でも次のように述べている。

The zombie first appeared as the revived corpse of *vodou* religion, and most of the early zombie films sustain a religious connection. But screen zombies have evolved to something quite different in their long and varied history, and have largely left their voodoo origins behind. In the late '60s and early '70s, *The Plague of the Zombies* (1966) and *Night of the Living Dead* (1968) redefined their appearance and behavior entirely. The zombie today is a limping, shambling, decaying ghoul in search of human flesh, utterly distinct from the robotic, deadpan zombie of early voodoo thrillers. The basic definition of a revived corpse with diminished mental faculties generally holds true through this evolution, though, and unites zombies from before the late－'60s metamorphosis with those after it. (44)

その後、Geroge A. Romero は *Dawn of the Dead* (1978)、*Days of the Dead* (1985)など、次々とゾンビ映画を生み出した。Roger Luckhurst. *Zombies: A Cultural Hisotry* (2015) は次のように述べている。

We have finally arrived at the zombie that everyone thinks they know: the horde unleashed by George a. Romero's *Night of the Living Dead* (1968), but only really consolidated ten years later with its sequal, *Dawn of the Dead*. Romero spawned an army of imitators, particularly in the European horror industry. It is in this sequence of films, from horror cinema's glorious decade of perverse wonders, that the zombie came together as a relentless, devouring, cannibalistic creature driven by insatiable hunger to turn living flesh into dead meat. (45)

映像には絶大な視覚的効果があることは言うまでもないことだ。このため、「恐怖」を売りにする恐怖映画、オカルト映画、モンスター映画等は文字（文学作品）よりもさらに強いインパクトを観客に与えることができる。反対にその製作が中途半端であれば、大きな反響を呼び起こすことはできないだろう。1920 年・1930 年代の初期のゾンビ映画はフランケンシュタインの怪物やドラキュラのようにそのキャラクターを定着させることが十分にできなかった。ゾンビのキャラクターの印象を定着させたのは *Night of the Living Dead* (1968)まで待たなければならなかった。*Night of the Living Dead* (1968) はいわゆるゾンビ映画の金字塔であるが、この映画では「ゾンビ」(Zombie)という言葉が使用されていないことも付け加えておきたい。

Shephen Jones "Introduction: The Dead that Walk" (2013)でも次のように述べている。

From Bob Hope's comedie capers in *The Ghost Breakers* (1940) and producer Val Lewton's atmospheric reworking of *Jane Eyre, I Walked with a Zombie* (1943), through to George Romero's oginal dystopian trilogy (Night of the Living the Dead

[1969], *Dawn of the Dead* [1978] and *Day of the Dead* [1985] and the numerous European rip- offs, the zombie finally reached a level of identification in the horror pantheon equal to that of its generic companions: the vampire, the Frankenstein monster, the werewolf and the mummy. Yet, despite these and other momrable titles, The walking (dancing?) dead probably reached a commercial pinnacle in 1983 with Michael Jackson's "Thriller" video. (46)

また、Wade Davis. *The Serpent and the Rainbow* (Simon & Schuster, 1985)に触発された製作された Wes Crave, diretor. *The Serpent and the Rainbow* (1988) も注目しておきたいものだ。翻訳書の「訳者あとがき」によれば以下の通りである。

著者ウェイド・デイヴィスは 1953 年生まれ、ハーヴァード大学で人類学と生物学を学び、民族植物学の分野で博士号を得ている。彼は、ハーヴァード植物学博物館に所属して、8つのラテン・アメリカ諸国の 15 の部族集団を対象にフィールド・ワークを行なったのち、ハイチのゾンビの科学調査を依頼された。人をゾンビにする過程では、死とまぎらわしいような状態を引き起こす薬と、その解毒薬が用いられていると考えられてのことで、もしその処方が発見できれが、麻酔学の分野で大きな貢献をするはずだった。(47)

現代のような科学全盛の時代、インターネットの時代でも、ゾンビにハマってしまう理由として清水崇（談）／編集部（構成）「日本ホラー映画の旗手・清水崇、『ゾンビ』を語る」（2019）では次のように述べている。

『ゾンビ』に憑りつかれた最大の理由はストーリーやキャラクターではなく、あの世界観です。「地獄があふれて死者がこの世を歩き回る」っていう台詞がはやり秀逸だと思います。理由もなく死者が蘇ったときのパニック状態から人間同士の諍いまで、すべての希望の行きどころが変わってしまう凄まじさですね。世界がひっくり返ってしまう焦燥感。その様子を初めて観たとき、ぞっとしたのと同時に「映画ってこんなに凄いことができるんだ」と意識したんです。劇作であっても、そこに描かれているものが虚構だと捉えきれない強烈な世紀末の感覚があった。あの世界観を作ったロメロは本当に凄いと思います。(48)

圧倒的な映像による世界観が大きな要因であることは否定できない。

6　ゾンビ研究

ゾンビ研究の状況はどのようなものであろうか。June Michele Pulliam and Anthony J. Fonseca, editros. *Encyclopedia of the Zombie: The Walking Dead in Popular Culture*

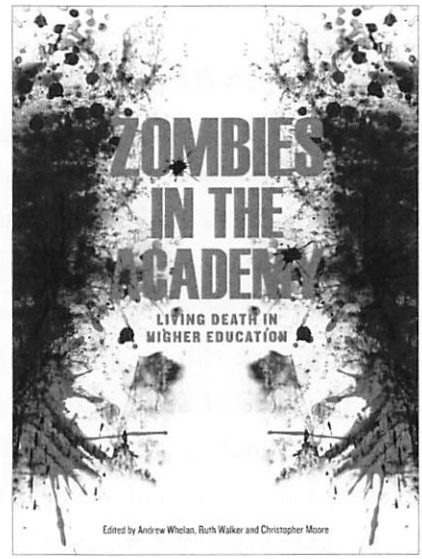
and Myth (2014)には June Michele Pulliam による“ZOMBIE STUDIES”の項目がある。その冒頭は以下のように始まる。

> Zombie studies is an erea of academic inquiry where the trope of the zombie is used to consider upon ideas about consciousness, particularly whether free will is an illusion in that all of our wills may be subordinated by culture and/or biological forces have flourished in recent years alongside of the explosion of zombie fiction. (49)

更に同書では2010年以降のゾンビ研究を紹介しながら、その論じようとしていることとして次のようなことを指摘している。

> Zombies, which seem to be so unlike us, are more similar than we first realized, and as result, they can explain many unpleasant truths about ourselves and our world. (50)

科学の時代であるがゆえに、却って呪術として存在と非現実の両方で存在するゾンビがエンターテイメントのコンテンツとして多様化したことにより、ゾンビを通して人間の心理や行動、社会のありようなどを反映させる表現形式のひとつとなっていることを示唆しているようにも思える。



Andrew Whelan, Ruth Walker and Christopher Moore, editors. *Zombies in the Academy: Living Death in Higher Education* (2013)に収載された Jonathan Paul Marshall “The intranet of the living dead: software and universities” ではゾンビへの言及について次のように述べている。

> The earliest mentions of zombies imply they are spirits or ghosts: ‘the title whereby he [Brazilian chief] was called, is the name for the Deity, in the Angolan tongue. NZombi is the word for Deity’ (Southey 1819:24). Schele de Vere reports that the word ‘Zombi, a phantom or a ghost, [is] not unfrequently heard in the Southern States in nurseries and among the servants...[It] is a Creole corruption of the Spanish *sombra* [shade, shadow] which at times has the same meaning’ (1872:138). Lafcadio Hearn portrays the zombie as a boundaries and categories. (51)

また、ゾンビに関する恐怖・不安として次の5つを挙げている。

There are five sources of unease with zombies: firstly, they are ambiguous (alive but dead); secondly, you can becom one yourself against your will; thirdly, the zombie master may lose control; fourthly, they cannot be stopped by discussion or moderate force; and finally that zombies will eat you. (52)

エンターテイメントのコンテンツをアカデミックな場で論じる素地が出来上がってきた背景があることも見流せないところだ。ゾンビ現象を紀行文や報告として発表されたものを基に映画界に進出したゾンビはゾンビ映画、あるいはゾンビものとしていまやすっかりコンテンツとして定着した。日本ではTVドラマ、マンガの題材ともなっている状態である。

7　文学上のゾンビの原点は？

本稿のタイトル「文学上のゾンビの原点は？」に対する解答はまさに“Yes and No”ということになる。ゾンビ映画というジャンルはあってもゾンビ文学というジャンルは残念ながら存在するとは言い難いものがある。ただ、ここで考えなくてはならいことは「文学」（literature）とは何かということだ。この話題はボブ・ディラン（Bob Dylan, b.1941）がノーベル文学賞を受賞した時、受賞者自身も強く感じたことだ。

I began to think about William Shakespeare, the great literary figure. I would reckon he thought of himself as a dramatist. The thought that he was writing literature couldn't have entered his head. His words were written for the stage. Meant to be spoken not read. When he was writing Hamlet, I'm sure he was thinking about a lot of different things: "Who're the right actors for these roles?" "How should this be staged?" "Do I really want to set this in Denmark?" His creative vision and ambitions were no doubt at the forefront of his mind, but there were also more mundane matters to consider and deal with. "Is the financing in place?" "Are there enough good seats for my patrons?" "Where am I going to get a human skull?" I would bet that the farthest thing from Shakespeare's mind was the question "Is this literature?" (53)

But, like Shakespeare, I too am often occupied with the pursuit of my creative endeavors and dealing with all aspects of life's mundane matters. "Who are the best musicians for these songs?" "Am I recording in the right studio?" "Is this song in the right key?" Some things never change, even in 400 years.
Not once have I ever had the time to ask myself, "Are my songs literature?" (54)

literture=literary works と考えると、「文字で書かれた内容を伴うもの」とすれば、小説・詩、さらに演劇の脚本だけでなく、エッセイ、新聞記事、報告書の類までこれに含まれることになるからだ。実は英米文学ではなく英語文学と表記する場合にもこうした問題が生

じていたのだ。[55] 木下卓他編『英語文学事典』(2007) の「まえがき」には「文学」そのものへの見直しという点が指摘されていることは興味深い。

> 80 年代以降の英米文学研究の世界も大きく様変わりした。「正典(canon)」の見直しに典型的に表れているように、文学の歴史を把握し、編成する原点そのものに特定の支配的イデオロギーや価値観が反映されていることが指摘されはじめ、そのような視点からとらえられた文学観そのものが問い直されるに到った。そもそも私たちが＜文学＞だと信じてきたものは、時代のパラダイムにすぎなかったのではないか。そこに存在すると信じてきた実存や人生や文化や思想や美意識といった認識の枠組みそのものが、何かを特権的に選別し、同時に何かを排除する一定の価値観もしくはイデオロギーの装置にすぎなかったのではないか。ある作品を傑作と判断し、ある作品を駄作と判断する。その基準そのものが＜文学＞という制度の所産にすぎないのではないか。こうした懐疑が＜文学＞という世界の自明性を突き崩していったのである。[56]

ここで "literature" の定義をインターネット上の Cambridge Dictionary で確認しておきたい。

- written artistic works, especially those with a high and lasting artistic value
- all the information relating to a subject, especially information written by experts [57]

上記のものでは内容として "artistic"、下記のものは "information" に注目すべきものだ。当然後者の方が範囲は広くなる。

さて、ここで「文学上のゾンビの原点」を考えるにあたり、注目すべき指摘がある。Peter Dendle. *The Zombie Movie Encyclopedia* (2001)ではゾンビの最大の特徴を次のように述べている。

> Zombies are, furthermore, the only creature to pass directly from folklore to the screen, without first having an established literary tradition. [58]

ゾンビは "established literary tradition" なしに、伝承をもとにした映画により誕生したきわめて特異な存在ということなのであろうか。ゾンビがどのように世界に知られるようになったかは筆者もこれまで取り上げきたが、それは文学作品というよりは記録や報告の類であった。[59] Shephen Jones "Introduction: The Dead that Walk" (2013)にも次のようにある。

> However, despite blending many of horror fiction's major thematic archetypes－wichcraft, a mindless monster, the living dead－the zombie has rarely made a success-

ful transition to the novel form (in the same way as, say, the vampire has). [60]

ゾンビが文学作品として大きな評価を受けたのは 1995 年になってからのことである。Anthony J. Fonseca "ZOMBIE (NOVEL)" (2014)によれば次の通りである。

Zombie is a Bram Stoker Award—winning espitolary novel by Joyce Carol Oates (1938-), published in October of 1995. [61]

また、タイトルについても次のように述べている。

The titular use of the term zombie by Oates has little to do with concept of the reanimated dead. Rather, the novel has more in common with the trope of the Voodoo zombie, a mindless human slave created by rituals and serums. Of Oate's 50 plus novels, *Zombie* is her most notable foray into the horror genre. [62]

当然のことだが、一般にゾンビの認知を高めたのは映画による功績が大きい。その映画はおもに次の 3 作品がその原点ともいえるものだ。ここで確認しておきたいことは、こうした映画の着想を与えたものは何かということだ。少なくても 1910 年代、1920 年代、あるいはそれ以前にゾンビに関するものが世の中に発表されたということだ。さらに映画がおもに欧米で製作されていることを考えると、ゾンビがこれまで欧米で知られることがなく、ゾンビの存在が伝えられると、死体蘇生などの不可思議な状況がエンターテイメントに受け入れられ、映画の題材として活用されたということになろうか。

1920 年　ロベルト・ヴィーネ監督『カリガリ博士』(ドイツ)

※ゾンビ映画の始祖として位置付けるものある。[63]

※L. Andrew Cooper "CABINET OF DR. CALIGARI, THE" (2014)では次のような説明がある。

The Cabinet of Dr. Caligari (1920) cannot be overestimated for its influence in film. It made German Expressionism a worldwide cinematic phenomenon and is arguablythe first feature-length horror film, featuring character whose control over another is similar to the control of a Voodoo bokur over the traditional zombie, trapped in a death-like sleep. The victim is transformed via special effects makeup into a pale somnambulist, his pallor highlighted by dark shadows around his eyes, making him seem like prototype for the filmic living corpse. His slow lumbering walk is a predecessor of that of the zombies in Gorge Romero's *Night of the Living Dead* (1968), which in turn provided the conventions or rules to which future fictional walking dead would conform. [64]

1930年　ウォルター・フラッター監督『キュリオシティーズ』(アメリカ)

※短編ニュース映画。ブードゥー教儀式の紹介。[65]

※June Michele Pulliam and Anthony J. Fonseca, editros. *Encyclopedia of the Zombie: The Walking Dead in Popular Culture and Myth* (2014)では取り上げられていない。

※Roger Luckhurst. *Zombies: A Cultural Hisotry* (2015)では次のような説明がある。

> In fact, Seabrook's 'dead men working in the cane field's had already appeared in a short section of *Walter Futter's Curiosities* in 1930, a compendium of exotic documentary footage that claimed to catch visual evidence which confirmed Seabrook's account. [66]

1932年　ヴィクトリー・ハルペリン監督『ホワイト・ゾンビ』(アメリカ)

※世界初のゾンビ映画。[67][68][69] 邦名は『恐怖城』。

※Anthony J. Fonseca "WHITE ZOMBIE" (2014) では次のような説明がある。

> *White Zombie* is a 1932 American horror film directed by Victor Halperin. Bela Lugosi stars as Murder Legendre, a Voodoo master capable of turning people into zombified slaves. [70]

※福田安佐子「『ホワイト・ゾンビ』におけるゾンビの描写—シーブルック『魔法の島』と古典ホラー映画との関連から」(2019)では次のような説明がある。

> さらに「ゾンビ」なるものの歴史や変遷のなかで本作を見ていけば、本作がが果たした役割とは、ハイチを中心としたクレオール文化の文脈から「ゾンビ」を切り離し、現在に連綿と引き継がれるモンスターや恐怖の表現を新しくスクリーンの上に成形したことであるとも評価できる。すなわち、本作の「魂なき身体」としてのゾンビが、俯き加減でゆっくり動き、単純な動作のみを繰り返す様子や、銃弾にも倒れることなくこちらに襲いかかってくる描写は、現代にに広まっているゾンビと明らかに類似したものであり、ここに雛形を見出すことは容易である。『ホワイト・ゾンビ』をゾンビ映画史上の端緒としてその重要性を主張する先行研究にはロジャー・ラックハーストの『ゾンビ最強ガイド』［ラックハースト 2017］やゲイリー・D・ローズの『ホワイト・ゾンビ：ホラー映画のアナトミー』［Rodes 2001］が代表的なものとして挙げられる。[71]

つまりゾンビ文学は存在しないまでも、ゾンビを扱った文章はあり、紀行文、ドキュメントのものがある。整理すると次のようになるのではないだろうか。福田安佐子(2019)でもアン・コルダスなどの指摘を紹介しながら次のように取り上げている。

シーブルック以前に「ゾンビ」が西洋の出版物に記載された最初のものとしては、1792年のモロー・デュ・サン・メリーによる記述がある。そこでのゾンビとは「クレオールのことばで精霊（sprit)、亡霊（revenant）を意味する」と明記されている［Moreau de

Saint-Méry 1797:52]。また、それ以外を表す例としては、「ゾンビ」とはヴードゥー教の「蛇神」にまつわるもの、もしくは、病気を癒す、もしくは幸運をもたらすために身体から魂を抜く行為を指すものなどが挙げられる [Murphy 2011:49-501]。(72)

[Moreau de Saint-Méry 1797:52] とは Moreau de Saint-Méry. *Description topographique, physique, civile, politique et historique de la partie francaise de l'isle Saint Domingue (etc.) tome 1.* In Blanche Maurel and Etienne Taillemite eds. Paris: Société Francaise d'Histoire d'Outre-Mer.1797)、[Murphy 2011:49-501] とは Kieran M. Murphy. *WHITE ZOMBIE. Contemporary French and Francophone Studies*, 15(1)のことである。

英語圏に馴染みのない "zombi"は英語圏では "zombie" として紹介されることになる。英語に「ゾンビ」(zombie)が登場するのは 1819 年であるという。

> *The Oxford English Dictionary* credits Lake Poet Robert Southey as the first English writer to use the Z-word, in his 1819 History of Brazil, so Blessebois scooped him by more than 100 years in French. (73)

ノーマン・イングランド（談）／岡本敦史（構成）「おさらい　『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』以前のゾンビ史」（2019）でも次のように述べている。

> 英語の文章で「Zombie」という言葉が最初に登場したのは、1819 年、ロバート・サウジーというイギリスの詩人が、ブラジルの歴史を翻訳したとき初めてその言葉が使われた。西洋では、現在のゾンビと同じような意味でグール（Ghoul＝人喰い鬼）という言葉もよく使うけど、これはアラブ起源の言葉で、中米のゾンビとはだいぶ違う。死者が蘇ったり、蘇らせたりする話は西洋にもあって、日本にもそういう怖い昔話がきっとあるはずだよ。メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』（1818 年）、H・P・ラヴクラフトの『死体蘇生人ハーバート・ウェスト』（1922 年発表）なども、その系譜にあるといえる。(74)

1819 年では単に紹介されたに過ぎないが、その前年の 1818 年に『フランケンシュタイン』が発表されたことは興味深いところだ。西山智則『ゾンビの帝国　アナトミー・オブ・ザ・デッド』（2019）では Ann Kodask "New South, New Immigrants, New Women, New Zombies: The Historical Development of the Zombie in American Popular Culture" (Christopher M. Moreman and Cory James Rushto, editors. *Race, Oppression and the Zombie: Essays on Cross-Cultural Appropriations of the Caribbean Tradition*, McFarland, 2011)を紹介しながらアメリカので「ゾンビ」初出例を紹介している。

> 現在の「ゾンビ(zombie)」とは綴りが違うが、「ゾンビ(zombi)」のアメリカでの初出

は、1838年にオハイオの新聞『アルトン・テレグラフ』にリプリントされた「知られざる画家」という短編で、画家が絵を描くのを助けてくれる精霊だった［コーダス　16－17頁］。(75)

英語による“Zombie”の登場を概観すれば以下の通りとなろう。

1　Robert Southey, translator.　*History of Brazil*（1819）に初めて英語で“Zombie”が紹介された。
2　死者を蘇生させ復活させるというテーマを科学的な内容を含み本格的に創作されたのは Mary Wollstonecraft Godwin Shelly.　*Frankenstein: or The Modern Prometheus*（1818）であった。
3　Lafcadio Hearn “The Country of the Comers-Back”（1889）
4　Jack London の *A Thousand Deaths*（1899）
5　Lafcadio Hearn.　*Two Years in the French West Indies*（1890）
6　死者を医学的な根拠を駆使して創作された H.P. Lovecraft “Herbert West－Reanimator”（1921-1922）
7　ハイチのゾンビを記録した William B. Seabrook.　*The Magic Island*（1929）
8　Peter Haining, editor.　*Stories of the Walking Dead: Zombie*（1985）

2の『フランケンシュタイン』はもちろんゾンビではないが、死者蘇生を科学を用いて実践しようとした点ではその先駆けとして取り上げるべきものだろう。この作品に着想を得てさらに医学的に内容を突き詰めていったのが“Herbert West－Reanimator”（「死体蘇生者ハーバート・ウェスト」）ということになる。

3のハーンの文章は5の *Two Years in the French West Indies*（『フランス領西インドの二年間』）の中に収載された。このハーンの功績は英語圏にゾンビ現象が伝えられたことにある。ハーンはもともと超自然現象や神秘主義なものに興味を持っていた。それは日本に来てからも同様で、*Kwaidan*（1904）に発表したことからも垣間見られる。ハーンが発表した“The Country of the Comers-Back”はゾンビを取り上げたものとして英語圏では *The Oxord English Dictonary* にも掲載されるくらい英語圏では初期の文献であるが、実際にはそれほど注目を浴びなかったようだ。

Lafcadio Hearn (1850-1904) actually wrote about zombies some forty years W.B. Seabrook, but his work attracted little attention at the time and his name did not become widely known until the close of the century when he moved to Japan and began to write about the extraoadinary supernatural lore of that century.　Although it is often said that Hearn was an American, he was born one a Greek island spent some time in Ireland and England before moving to America and takking up a career as a journalist.　In between his move from America to Japan, he spent two years

from 1887 to 1889 on the island of Martinique and among other things investigated the zombie stories which he heard from local people. His essay, "The Country of the Comers-Back" was published in *Harper's Magazine* in ! (76)

John Richard Stephens "Zombies, Vampires, Mummies, and Other Reanimated Corpses" (2010) でも取り上げられている。

Prior to this—from the 1920s to the 1960s—zombies were largely portrayed as innocent victims of voodoo sorerers. These people were resurrected from the dead to become blindly obedient slaves. For many people in the Caribbean, freshly liberated from slavery, the idea of an eternity of mindless servitude was, understandably, a tremendous horror.

There was a belief in zombies in the 1800s but, except for the name, they were unrecognizable compared to today's zombies. Back then, they were more like spirits that could possess people, animals, or everyday objects. Lafcadio Hearn, while living on the Caribbean island of Martinque, described a woman who opened her front door at about five in the morning and saw a huge crab walking down the street. The woman was convinced this crab was a zombie. (77)

同じく、カリブ海のハイチについて 30 年後に発表された William B. Seabrook. *The Magic Island* (1929)は大きな注目を浴びたのはアメリカとハイチとの関係がこの 30 年間で大きく変わったという点であったかもしれない。

4については短編小説として発表されたものの、ゾンビものとしては決して注目を浴びたわけではないが、Victor Halperin, director. *Torture Ship* (1939)として映画化もされている。 "SFE: THE ENCYCLOPEDIA OF SCIENCE FICTION"によれば、同小説については次のように紹介している。

His first sf story, "A Thousand Deaths" (May 1899 *Black Cat*), combines some key themes of nineteenth-century sf: a cold-hearted lone Scientist uses his own son in revivification experiments and is then dematerialized by a super-Weapon invented by the son. (78)

"A Thousand Deaths"の小説中には "zombie" "living dead" などの表現はない。

6の H.P.Lovecraft "Herbert West—Reanimator" は Mary Shelley. *Frankenstein* をさらに現代版、医学的な面を強化して書かれ、のちにこの小説を原作として映画 *Re-animater* が製作された。邦題は『ZOMBIO／死霊のしたたり』であった。

7についてはヴィクトリー・ハルペリン監督『ホワイト・ゾンビ』(アメリカ、1932) の着想のもとになっている。Peter Haining "Introduction" (Peter Haining, editor. *Stories*

of the Walking Dead: Zombie, 1985)でも次のような指摘がある。

As I indicated, it was Seabrook's report 'Dead Men Working in the Cane Fields', in 1932, caught the eye of a Hollywood producer, Victor Halperin, who, like everyone else in the film capital, was on the look-out for material to cash in on the popularity of horror films which had just been generated by Uniersal Pictures' two greate successes, *Dracula* and *Frankenstein*, made the previous year. In Seabrook's report of zombies, it seemed to him, was an unusual them, and one which had not previously been brought to the sreen. (79)

なお、'Dead Men Working in the Cane Fields'は William B. Seabrook. *The Magic Island* (1929)の一部である。

また、福田安佐子「『ホワイト・ゾンビ』におけるゾンビの描写—シーブルック『魔法の島』と古典ホラー映画との関連から」(2019)の中で、ラックハーストからの引用を交えながら次のように述べている。

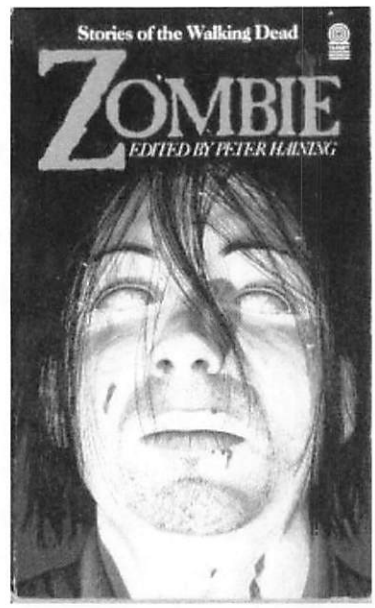
ラックハーストは、アメリカの大衆文化におけるゾンビの登場について論じる中で、『魔法の島』の出版当時、ハイチの政治的にも文化的にもアメリカで注目されていたことは、この時代にカリブ諸島に取材した紀行文や探検フィルムが急激に増えたことからも明白であるとする。さらに彼は、そういった数々の作品の中において『魔法の島』は、「何十年ものあいだヴードゥーや食人文化、黒魔術といった空想だけに過熱気味の、悪魔扱いされてきたハイチの長い歴史の胎から生まれた物語として理解する必要がある」と注意を促している［ラックハースト　2017:61］。すなわち、この時代に有象無象に存在した紀行文もしくはドキュメンタリー映像は、共通して西洋主体のスキャンダラスな話題を提供することを目的にしていた。それは風俗や文化をそのまま詳述することよりむしろ、見慣れぬ習慣などに対して拡大解釈や捏造を行い、大衆の興味を惹きつけるような物語に仕立てて提供することで人気を集めていたのである［Rhodes 2001:78］。シーブルックはまさにその潮流を象徴する人物であり、ゾンビだけでなく、食人や降霊術といった話題を振りまくことによって世間の注目を集めていた。(80)

ここで最も注目しておきたいのは８の Peter Haining, editor. *Stories of the Walking Dead: Zombie* (1985)である。ゾンビの物語集としてはじめてまとめられたものだ。その後同様のものが出版されるようになった。その裏表紙には次のような紹介文がある。

Even the human fear of death pales beside the terror ofthe undead. The zombie—the walking deadman—brings the realms of the supernatural; well within the bounds of belief, for the reawakened corpse is a horrifying imaginable phenomenon. From the early 'Dead Men Working in the Cane Fields' by W.E.Seabrook to W. Stanley

Moss's masterly 'The Zombie of Alto Parana' and the more recent 'Ballet Nègre' by English writer Charles Birkin, Peter Haining's collection of the best of zombie stories is guaranteed to chill the blood and raise the hairs on the back of your nect ...

本書は“the Walking Death”の“stories”を集めたものだ。記事、記録、小説になっているものを集めたものだ。その収録内容は以下のものである。



"Introduction" by Peter Haining
"Dead Men Working in the Cane Fields" by W.B. Seabrook
"Salt Is Not for Slaves" by G.W. Hutter
"The Country of the Comers-Back" by Lafcadio Hearn
"Jumbee" by Henry S. Whitehead
"White Zombie" by Vivian Meik
"I Walked with a Zombie" by Inez Wallace
"America Zombie" by Dr Gordon Leigh Bromley
"While Zombies Walked" by Thorp McClusky
"The House in the Magnolias" by August Derleth
"The Zombie of Alto Parana" by W. Stanley Moss
"Ballet Nègre" by Charles Birkin
"The Hollow Man" by Thomas Burke
Acknowledgements

Peter Haining "Introduction" には興味深い指摘がある。

There is no more suitable introduction to the world of the Zombie than W. B. Seabrook's 'Dead Men Working in the Cane Fields' (1929) for it was one of the earliert stories to be written about the phenomenon of the 'living undead' and also provided the inspiration for the very first zombie movie, *White Zombie*, made in 1932. (81)

. . . . . .

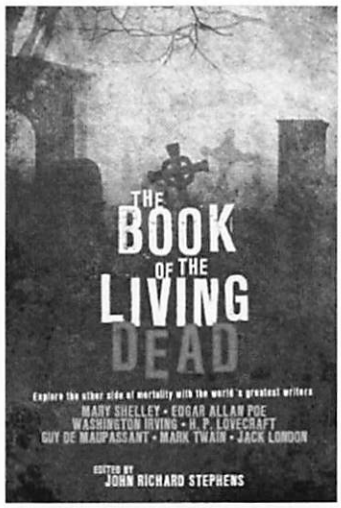
I have for some years been surprised that no attempt has been made to bring together in a single volume the best short stories about zombies. While collections about vampires, werewolves, monsters and such like proliferate, no such anthology of zombie tales has ever previously been assembled. Admittedly the writing available is by no means as plentiful as that dealing with the other denizens of the supernatural, but what has been created is fascinating, informative and entertaining.

Part of the reason for this scarcity of tales about the Walking Undead is no doubt due to the fact that the subject has no great novels to its credit or even famous zombie

Characters－nothing, indeed, to compare with Bram stoker's Dracula, Mary Shelley's Frankenstein or Guy Endore's The Werewolf of Paris, all of which have been endlessly reprinted, imitated and filmed. (82)

Peter Haining, editor. *Stories of the Walking Dead: Zombie* (1985)はおそらくゾンビ文学を集めて発表した最初のものかもしれない。その後もこうしたものがいくつか発表されている。手元にある2冊についても紹介しておきたい。

John Richard Stephens, editor. *The Book of the Living Dead* (2010)の内容は次の通りである。



"Zombies, Vampires, Mummies, and Other Reanimated Corpses" by John Richard Stephens
"The Monkey's Paw" by W.W. Jacobs
"The Amorous Corpse" by Théophile Gautier
"The Metamorphoses of a Vampire" by Charles Baudelaire
"Frankenstein (Abbreviated)" by Mary Shelley
"The Ghoul" by Sir Hugh Clifford
"The Facts of M. Valdemar's Case" by Edgar Allan Poe
"The Corpse That Ran Away" by *THE EVENING TELGRAM*
"The Hand" by Guy de Maupassant
"Herbert West: Reanimator" by H.P. Lovecraft
"The Hollow Man" by Thomas Burke
"Wake Not the Dead" by John H. Knox
"The Coffin-Maker" by Alexander Pushkin
"For the Blood Is the Life" by F. Marion Crawford
"The Adventure of the German Student" by Washington Irving
"The Tomb of Sarah" by F.G. Loring
"Teig O'Kane and the Corpse" by Douglas Hyde
"The Name on the Stone" by Lafcadio Hearn
"The Vampire of Croglin Grange" by Augustus Hare
"Thurnely Abbey" by Perceval Landon
"A Curious Dream (Containing a Moral)" by Mark Twain
"The Story of Baelbrow" by E. and H. Heron
"The Hero of the Tomb" by Sir Walter Scott
"The Cross-Roads" by Amy Lowell
"A Dead Love" by Lafcadio Hearn
"A Thousand Deaths" by Jack London

John Richard Stephens "Zombies, Vampires, Mummies, and Other Reanimated Corpses"ではゾンビについて次のように述べている。

When thinking of the living dead, the first thing that comes to mind is, of course, zombies. The modern idea of zombies is relatively recent. Hordes of wild corpses trying to tear apart the living and eat them is an idea popularized by the 1968 film *Night of the Living Dead* and its sequels. It was in the 1985 movie *The Return of the Living Dead* where zombies first focused on eating brains. The creatures in the Living Dead movies were actually undead ghouls, not zombies, but the public has come to see them as zombies, and bowing to the weight of public usage, the definition of the word "zombie" changed for the second time. (83)

ここではゾンビの定義が変化したことを指摘している。グールとゾンビをどのように捉えるかによって本来異なるからだ。しかし、ここで重要なことは一般大衆がどのように捉えているかだ。「生きた屍」が死体を食らう、人を食らうのが本来グール。生きた屍が歩く、人を襲うといったゾンビには本来、死体を食らう、人を食らうということはなかった。ではどこからこの設定が変わったのか。それはダン・オバノン監督『バタリアン』(*The Return of the Living Dead,* 1985) でゾンビが初めて脳を食べたところから、ゾンビの意味が変わったという指摘である。

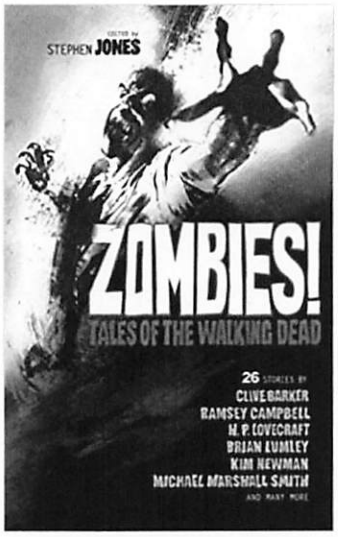
Death is creeping up on us all and sooner or later it will strike each of us down. We do our best to ignore it, but our time is running out. Many people are confident they know what will happen after that, but no one really knows for sure. Belief is not the same as knowledge, no matter how much we may want to convince ourselves that it is.

While the idea of life after death greatly appeals to most people, becoming one of the living dead is not, of course, what they have in mind. The tales in this book take the desire for a continued existence and turn it into a nightmare. Everyone also has a strong desire for the return of loved ones who have passed on. These tales also play off that to create some chilling images. This book is about the dark side of life after death.

Hopefully these creepy stories will give you another view of mortality, with the added benefit of keeping you awake late into the dark and lonely night. (84)

Stephen Jones, editor. *Zombies: Tales of the Walking Dead* (2013)の内容は以下の通りである。

"Sex, Death and Starshine" by Clive Barker
"Rising Generation" by Ramsey Campbell
"The Song of the Slaves" by Mainly Wade Wellman
"The Ghouls" by R. Chestwynd-Hayesk
"The Facts in the Case of M.Valdemar" by Edgar Allan Poe
"Sticks" by Karl Edward Wagner
"Quietly Now" by Charles L. Grant
"The Grey House" by Basil Copper
"A Warning to the Curious" by M.R. James
"The Crucian Pit" by Nicholas Royle
"The Disapproval of Jeremy Cleave" by Brian Lumley
"Herbert West—Reanimator" by H. P. Lovecraft
"Treading the Maze" by Lisa Tuttle
"Out of Corruption" by David A. Riley
"The Taking of Mr Bill" by Graham Masterton
"Schalken the Painter" by J. Sheridan Le Fanu
"Cliniccally Dead" by David A. Sutton
"They're Coming for You" by Les Daniels
"Mission to Margal" by Hugh B. Cave
"Later" by Michael Marshall Smith
"Marbh Bheo" by Peter Tremayne
"The Blood Kiss" by Dennis Etchison
"Night After Night of the Living Dead" by Christohper Fowler
"The Dead Don't Die!" by Robert Bloch
"Patricia's Profession" by Kim Newman
"On the Far Side of the Cadillac Desert with Dead Folks" by Joe R. Lansdale
"Homo Coprophagus Somnambulus" by Jo Fletcher



ゾンビの物語を集めたゾンビ集を3冊例として取り上げたが、実際に"zombie"という表現がないものが多く集められている。このことは"zombie"の定義にも大きく影響していることになる。これには一般人の"zombie"に対するイメージや印象が大きく影響していることになる。もちろん、そのイメージや印象に大きく影響しているのは映画であることもまちがいないだろう。ゾンビ文学はブードゥー教の呪術を離れ、恐怖映画、オカルト映画などの影響を受け、あとから死者が蘇生する話を中心に、組み入れられたと考えた方がよいだろう。

エピローグ

「文学上のゾンビの原点は？」については「文学」をどう定義するかによってその対応は分かれるだろう。ここでは“literature=written artistic works”と捉えるよりはさらに広義に捉え、“written information”“literary works”と考えれば、紀行文や報告文なども含めれば、英語に初めて言葉として「ゾンビ」が紹介されたという点では Robert Southy となり、「文学上のゾンビの原点」は Lafcadio Hearn と William B. Seabrook にあると言えるのではないだろうか。しかし、ゾンビが映画化され、一般にも周知されるようになった大きな要因としては William B. Seabrook. *The Magic Island* (1929)ということになる。怪奇小説として『フランケンシュタイン』、『ドラキュラ』が発表されたのは英文学の作品であるが、ゾンビは非キリスト教文化圏、非英語圏のものだ。このことはゾンビやミイラがひとつの独立した文学作品として 1920 年代及び 1930 年代に発表されなかった要因として考えることができるかもしれない。この時にはすでに映像の世界でゾンビがデビューしてしまい、文学創作活動が進まなかったのではないか。

ゾンビはヴードゥー教の呪術から離れ、謎の宇宙光線やウィルスが引き起こした恐怖の現象など、その原因も多様化している。ゾンビ現象は映画からデジタルゲーム、テレビドラマ、コスプレなど広がりを見せていることも今後注目していきたい。

注

(1) 伊東美和「ゾンビ映画の源流」(伊東美和・山崎圭司・中原昌也『ゾンビ論』洋泉社、2017 年 1 月)、p.77.

(2) 佐々木隆「ポップカルチャーにおけるゾンビ」(『ポップカルチャー・若者文化研究』第 5 号、ポップカルチャー・若者文化研究、2021 年 5 月)、p.2.

(3) June Michele Pullian “Mummies” (June Michele Pulliam and Anthony J. Fonseca, editros. *Encyclopedia of the Zombie: The Walking Dead in Popular Culture and Myth*, Greenwood Pub Group, 2014), p.174.

(4) John Richard Stephens “Zombies, Vampires, Mummies, and Other Reanimated Corpses” (John Richard Stephens, editor. *The Book of the Living Dead* (Berkley Books, 2010), p.2.

(5) 佐々木隆「ポップカルチャーにおけるゾンビ」、pp.7-8.

(6) 大形徹『不老不死　仙人の誕生と神仙術』(講談社、1992 年 7 月)、p.3.

(7) Ibid., p.10.

(8) Ibid., pp.16-17.

(9) Ibid., p.29.

(10) 三谷茉沙夫『不老不死伝説』(青弓社、1995 年 8 月)、p.190.

(11) 佐々木隆『ロボット 100 年　文学・マンガ・アニメ・映像』(武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2018 年 4 月)、pp.102-106.／佐々木隆「メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』(1818) が残したものとは？」(『日本英語文化学会会報』第 9 号、日本英語文

化学会、2018年11月)。以降の引用の部分は何度か引用している。

(12) 小野俊太郎『フランケンシュタイン・コンプレックス』(青草書房、2009年6月)、pp.14-15.

(13) 佐々木隆『文芸上・映像上の人造人間・ロボット・アンドロイド・サイボーグ』(中編)(武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2021年8月)、pp.525-526.

(14) Isaac Asimov. I, Robot. (Bantam Dell, 2004), pp.144-145.

(15) 小尾芙佐訳『われはロボット』(早川書房、2008年5月)、pp.222-223.

(16) Jason Porterfield. *Robots, Cyborgs, and Androids* (The Rosen Publishing Group Inc., 2019), p.14.

(17) 「シンギュラリティ」については Ray Kurzweil. *The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology* (Penguin Books, 2005, p.7)で説明されている。また、筆者の考察としては拙著『文芸上・映像上の人造人間・ロボット・アンドロイド・サイボーグ』(後編)(武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2021年8月)の「シンギュラリティ」(pp.923-936)で取り上げた。

(18) Mary Shelley. *Frankenstein 1818 text.* (Oxford: Oxford University Press, 2008), p.1

(19) シェリー/森下弓子訳『フランケンシュタイン』(東京創元社、1984年2月)、p.18.

(20) Mary Shelley. *Frankenstein 1818 text*, p.24.

(21) シェリー/森下弓子訳『フランケンシュタイン』、p.54.

(22) Mary Shelley. *Frankenstein 1818 text,* pp.38-39.

(23) シェリー/森下弓子訳『フランケンシュタイン』、p.74.

(24) Mary Shelley. *Frankenstein 1818 text,* p.191.

(25) シェリー/森下弓子訳『フランケンシュタイン』、p.297.

(26) 瀬名秀明編著『ロボット・オペラ』(光文社、2004年6月)、p.26.

(27) Roger Luckhurst. *Zombies: A Cultural Hisotry* (Reaktion Books, 2015), pp174-175.

(28) Ibid., p.176.

(29) Ibid., p.177.

(30) 厚生労働省「20年目を迎えるからこそ知ってほしい つながっていく臓器移植の輪」(https://www.mhlw.go.jp/houdou_kouhou/kouhou_shuppan/magazine/2017/10_01.html)(2022年2月10日アクセス)

(31) H.P. Lovecraft. *Herbert West* (CreateSpace Independent Publishing Platform, 2017), pp.1-2.

(32) H・P・ラヴクラフト/大瀧啓裕訳「死体蘇生者ハーバート・ウェスト」(H・P・ラヴクラフト/大瀧啓裕訳『ラヴクラフト全集』5、東京創元社、2000年8月)、p.75.

(33) 大瀧啓裕「作品解題」(H・P・ラヴクラフト/大瀧啓裕訳『ラヴクラフト全集』5)、p.336.

(34) Romero Curtiz. *History of Zombies* (Createspace Independent Pub, 2014), p.15.

(35) Ibid., pp.15-16/

(36) Roger Luckhurst. *Zombies: A Cultural Hisotry*, p.60.

(37) Peter Dendle. *The Zombie Movie Encyclopedia* (McFarland & Co Inc Pub., 2001), .140.

(38) Richard Bleiler "HERBERT WEST－REANIMATOR" (June Michele Pulliam and Anthony J. Fonseca, editros. *Encyclopedia of the Zombie: The Walking Dead in Popular Culture and Myth*) , p.129.

(39) 西山智則『ゾンビの帝国　アナトミー・オブ・ザ・デッド』(小鳥遊書房、2019 年 6 月)、p.87.

(40) Ditto.

(41) Ibid., p.88.

(42) Ibid., p.89.

(43) Stephen Jones "Introduction: The Dead That Walk" (Stephen Jones, editor. *Zombies!: Tales of the Walking Dead*. Caroll and Craft Publishing, 2013), p.xiii.

(44) Peter Dendle. *The Zombie Movie Encyclopedia*, p.13.

(45) Roger Luckhurst. *Zombies: A Cultural History*, p.137.

(46) Stephen Jones "Introduction: The Dead That Walk" (Stephen Jones, editor. *Zombies!: Tales of the Walking Dead*), pp.xiii-xiv.

(47) ウェイド・デイヴィス／田中昌太郎訳『蛇と虹　ゾンビの謎に挑む』(草思社、1988 年 6 月)、p.298.

(48) 清水崇（談）／編集部（構成）「日本ホラー映画の旗手・清水崇、『ゾンビ』を語る」(ノーマン・イングランド監修『【決定版】ゾンビ究極読本』洋泉社、2019 年 12 月)、p.146.

(49) "ZOMBIE STUDIES" (June Michele Pulliam and Anthony J. Fonseca, editros. *Encyclopedia of the Zombie: The Walking Dead in Popular Culture and Myth*), p.317.

(50) Ditto.

(51) Jonathan Paul Marshall "The intranet of the living dead: software and universities" Andrew Whelan, Ruth Walker and Christopher Moore, editors. *Zombies in the Academy: Living Death in Higher Education* (Intellect L & DEFAE, 2013), p.122.

(52) Ibid., p.123.

(53)「ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞スピーチ」(2016/12/11 15:47) (http://www.nikkei.com/article/DGXMZO10538020R11C16A2I00000/ (2017 年 1 月 4 日アクセス)

(54) Ditto.

(55) 佐々木隆『英語文学』に関する一考察—実践例と今後の展開—」(『武蔵野教育研究』第 3 巻第 14 号、武蔵野教育研究会、2017 年 12 月)、pp.1-20.

(56) 木下卓他編『英語文学事典』(ミネルヴァ書房、2007 年 4 月)、pp.i-ii.

(57) "literature" (https://dictionary.cambridge.org/ja/collocation/english/literature)(2022 年 2 月 5 日アクセス)

(58) Peter Dendle. *The Zombie Movie Encyclopedia*, pp.1-3.

(59)「ハロウィーンとゾンビ」(『日欧比較文化研究』第 24 号、日欧比較文化研究会、2020 年 10 月)、「ポップカルチャーにおけるゾンビ」(『ポップカルチャー・若者文化研究』第 5 号、ポップカルチャー・若者文化研究、2021 年 5 月)、「第 4 章　ハロウィーンとゾンビ」(『「ハロウィーン」とは何か』後編、武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2021 年 4 月)で取り上げた。

(60) Stephen Jones "Introduction: The Dead That Walk" (Stephen Jones, editor. *Zombies!: Tales of the Walking Dead*), p.xiii.

(61) Anthony J. Fonseca "ZOMBIE (NOVEL)" (June Michele Pulliam and Anthony J. Fonseca, editros. *Encyclopedia of the Zombie: The Walking Dead in Popular Culture and Myth*), p.308.

(62) Ibid., p.309.

(63) 岡本健『ゾンビ学』(人文書院、2017 年 4 月)、p.69.

(64) L. Andrew Cooper "CABINET OF DR. CALIGARI, THE" (June Michele Pulliam and Anthony J. Fonseca, editros. *Encyclopedia of the Zombie: The Walking Dead in Popular Culture and Myth*), p.34.

(65) ウォルター・フラッター監督『キュリオシティーズ』
(https://www.youtube.com/watch?v=ezrYkjKY8Ps&feature=emb_title)(2021 年 1 月 28 日アクセス)

(66) Roger Luckhurtst. *Zombies: A Cultural History*, p.76.

(67) 伊東美和「ゾンビ映画の源流」(伊東美和・山崎圭司・中原昌也『ゾンビ論』洋泉社、2017 年 1 月)、p.85.

(68) 伊東美和『ゾンビ映画大事典』(洋泉社、2003 年 3 月)、p.29.

(69) Peter Dendle. *The Zombie Movie Encyclopedia*. McFarland & Company, 2001), p.2.

(70) Anthony J. Fonsca "WHITE ZOMBIE" (June Michele Pulliam and Anthony J. Fonseca, editros. *Encyclopedia of the Zombie: The Walking Dead in Popular Culture and Myth*), p.297.

(71) 福田安佐子「『ホワイト・ゾンビ』におけるゾンビの描写―シーブルック『魔法の島』と古典ホラー映画との関連から」(『コンタクト・ゾーン』第 11 巻、京都大学大学院人間・環境学研究科文化人類学分野、2019 年 8 月)、p.125.

(72) Ibid., p.127.

(73) "BOOKS: The Zombie of Great Peru by Pierre–Corneille Blessebois　Interview with translator Doug Skinner"
(https://www.redfez.net/nonfiction/interview-books-zombie-great-peru-pierre corneille-blessebois-683 (2020 年 4 月 21 日)

(74) ノーマン・イングランド談／岡本敦史構成「おさらい『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』以前のゾンビ史」(ノーマン・イングランド監修『【決定版】ゾンビ究極読本』)、p.174.

(75) 西山智則『ゾンビの帝国　アナトミー・オブ・ザ・デッド』、p.120.

(76) Peter Haining "Introduction" (Peter Haining, editor. *Stories of the Walking Dead: Zombie,* 1985), p.15.

(77) John Richard Stephens "Zombies, Vampires, Mummies, and Other Reanimated Corpses" (John Richard Stephens, editor. *The Book of the Living Dead*), pp.1-2.

(78) "SFE: THE ENCYCLOPEDIA OF SCIENCE FICTION" (https://sf-encyclopedia.com/entry/london_jack)(2022 年 2 月 22 日アクセス)

(79) Peter Haining "Introduction" , p.13.

(80) 福田安佐子「『ホワイト・ゾンビ』におけるゾンビの描写―シーブルック『魔法の島』と古典ホラー映画との関連から」、p.126.

(81) Ibid., p.12.

(82) Ibid., pp.10-11.

(83) John Richard Stephens "Zombies, Vampires, Mummies, and Other Reanimated Corpses" (John Richard Stephens, editor. *The Book of the Living Dead* (The Berkley, 2010), p.1.

(84) Ibid., pp.2-3.

執筆者一覧

佐々木　隆　　武蔵野学院大学大学院・武蔵野学院大学教授

ポップカルチャー・若者文化研究　第９号
2022 年 6 月 28 日　発行日
ポップカルチャー・若者文化研究会　編集・発行

〒350 - 1328
埼玉県狭山市広瀬台 3－26－1
武蔵野学院大学　佐々木隆研究室内
ポップカルチャー・若者文化研究会事務局
問い合わせ先：takashi.sasaki@u.musa.ac.jp